

## シンポジウム報告

### 「学生独自プロジェクト」を通じた大学院生主体のシンポジウム開催の意義について

大久保 豊

本プロジェクトは、広島大学の「学生独自プロジェクト」の一環として、アジア社会文化研究会の参加メンバーである大学院生、研究員が企画から運営までを担当して実現したものである。本研究会は既に、2008年度に広島大学の「RM（リサーチマネジメント）養成プロジェクト」において、本プロジェクトの前身となるプロジェクトを運営した経験を持っている。二期にわたるプロジェクトにおいて本研究会が目的に掲げたのは、「領域横断的な大学院生同士のネットワークの形成」だった。

そのための具体的な手段として本プロジェクトは、学外研究者を招聘してのシンポジウムの開催と、その成果を『アジア社会文化研究』にまとめることを中核的な活動として設定した。シンポジウムがどのような内容であったのかについては、別稿にて他の報告者の詳細な報告を参照されたい。

本プロジェクトのリーダーを務めた筆者は、まずプロジェクトの企画段階に浮かび上がった課題についてどのように対処したのか、あるいはどのような課題を積み残したのかを総括したい。

本プロジェクトの申請時に課題となったのは、1、外部の講演者を招聘して広島大学でシンポジウムを開くのであれば、学生ではなく、大学が主催となって実施すれば良いのではないかと、2、院生がシンポジウムの運営に携わったというだけで、学生独自プロジェクトと言えるのか、という二点であった。

こうした課題についての指摘を受けて我々は、当初予定していた外部の研究者を講演者として招聘することに加え方向性を転換し、発表者を全て広島大学大学院生及び研究員とし、その上でコメンテーターとして外部の研究者を招聘することとした。また、発表者となる院生と研究員の選定、共通主題の設定（今回のシンポジウムの場合は「資料をどう扱うか」と「モノのエー

ジェンシー)は、本研究会のメンバーの協議を通じて最終的に決定した。

しかしこうしたプロジェクトの見直しを図ったことで、今回のシンポジウム、特にセッション毎の共通テーマ設定において、思わぬ「化学反応」が生じることとなった。これは、それぞれの院生が属する学問分野における潮流の中でも、とりわけどのような主題や議論を自分は知っておくべきなのか、という問題意識に焦点化したためと考えられる。そして、日々アップデートされ、細分化し続ける研究の中に身を置く研究者では顧みることの難しい、意外なテーマにも邁進することができたのである。今回のシンポジウムでいうならば、二つのキーワードである「資料」そして「モノ」がそれである。

今回のシンポジウムのように、必ずしも一様ではない学問的な背景を持つ発表者たちが、自らの研究成果を原資料として、これら二つのキーワードを論じようとすれば、議論はすれ違いを見せたり、平板なものになる恐れさえある。しかし、「私たちににとって資料とは何か」というテーマで「総合討論」を行うことで、個々の議論同士を結び付ける結節点を見出し、より発展的な論点へと昇華させることができたのではないか。各発表者、コメンテーターである崔真碩先生(文学)、東京外国語大学からお招きした床呂郁哉先生(人類学)、福井讓先生(歴史学)という多彩な学問的背景を持つ研究者らが集まり「資料」について議論することは、さらなる「化学反応」を生んだのである。具体的には、討論の中で、床呂先生が人類学的な観点から、研究資料の「エージェンシー」について議論を提起すると、コヴァレンコ氏が「信長公記」の資料的な価値についての見解に基づいて回答するといったように、発表者が現在進行形で思索を提示し、フロアーからの学識豊かなコメントも加わり、より洗練された議論への道筋が提示されることとなった。

各研究機関に所属する大学院生が、学術的なネットワークの形成において果たす役割は今後ますます増大していくと考えられる。本プロジェクトの経験は、こうした動きにおいて、広島大学が学生主体のネットワーク形成の拠点となるための知見の蓄積を提示し得ると確信している。

(alabama@urban.ne.jp)